

光と緑の風通信

発行/2010年2月25日 編集/福島県立医科大学看護学部 〒960-1295 福島市光が丘1番地 TEL024-547-1111 (代)

学舎から旅立つ卒業生へ 「人生の歩き方」

学部長 中山 洋子



今も書店の旅のコーナーに行くと「地球の歩き方」というガイドブックを見ることもある。三十年前、初めて英国に行ったときに私は買い求めた記憶がある。二月初旬、皆が国家試験の準備や実習などで必死になっていた

る時に、私は米国オレゴン州ポートランドに出かけた。今回の旅は、看護学のモデル・コア・カリキュラムの作成にあたっての情報収集であったが、私が無理を押しでも行きたかったのは、オレゴン・ヘルス・サイエンス大学大学院時代の恩師であるキャロライン・ホワイト先生に会うためでもあった。二十年前、不十分な英語力のまま看護学博士課程で学ぶことになった私を親身になって助けてくれた先生で、日本の看護系大学に客員教授として滞在していた一九九〇年代終わりに、本学部でも看護理論の特別講義をしていただいたことがある。そのホワイト先生は三年前に肺がんを患い、治療

を続けていた。一時期は、回復して安定していたが、昨春秋に急変し、この正月は悪化していた。二月に会えるまで何とか保つてほしいと私は祈る思いであったが、一月末に突然、本人からメールが届き、化学療法が効いてかなり元気になったということだった。その言葉通り、私がポートランドに着いた翌日、朝食をともし、夜には大学院時代の親しかった友人たちを招いて夕食会を開いてくれた。握手した手が熱っぽかったのが気になったが、私の前では気丈に昔の先生のままに振る舞っていた。とくに、夕食会で前菜、主菜、デザートと手際よくお皿を変えては盛りつけていく姿は、いつものホワイト先生であった。がんに冒されても決して崩すことのないその立ち居振る舞いは、ホワイト先生の生き方そのものを表しているように私は思えた。帰る際、米国の公衆衛生看護学の権威者であるホワイト先生は、

保健師教育を今後どのようにするかという課題を抱えている私に助言することも忘れなかった。
私は一週間の旅を通して「地球の歩き方」ではなく「人生の歩き方」を学んだ。ホワイト先生は、病んでもその生き方を変えることなく貫いていた。帰りの飛行機の中でホワイト先生の姿を思い出しながら、卒業していく四年生に私は、「人生の歩き方」を見つけてほしいと思った。この春から看護師の新人研修が開始されるので、これまでもよりは余裕を持って新人看護師としての第一歩を踏み出すであらう。これまでの自分の歩いてきた道、これからは自分の歩いていく道、決して平坦ではない道を全力で走り抜けるときもあれば、ゆっくり歩くときもあるであらう。自分の人生は、自分を最も生かすことのできる歩き方で歩んでほしい、それが卒業生への私の願いである。(なかやま ようこ)



ポストモダンのみなさんへ

心理学 志賀 令明



社会学者の東浩紀さんという人の文章の中に以下のようなフレーズがあります。
「ポストモダン化の進行と情報技術の進化に支えられ、私たちはいま、ひとつのパッケージでひとつの物語を

受容するよりも、ひとつのプラットフォームのうえでできるだけ多くのコミュニケーションを交換し、副産物としての多様な物語を動的に消費するほうを好む、そういう環境の中に生き始めている。言いかえれば、物語より

もメタ物語を、物語よりもコミュニケーションを欲望する世界に生き始めている。(動物化するポストモダン P2・152)

いなかっただということが起こりうるのが現代です。患者さんを理解したいならその人の生きてきた社会や時代に思いをはせる必要があります。その一部は伝統的な文学の中にもあります。たまには昭和中期くらいまでのブンガクに触れて下さい。高齢者と呼ばれる人たちが紡ぎ上げてきた一回限りの物語の片鱗に触れることができます。 (しが のりあき)

感謝です

大学院 伊藤 佳美



2年前「私は本当に看護師として患者さんやご家族の前にはたててくれるのか」という疑問を抱き、もう一度看護を学びたいと思い、大学院に入学しました。この2年間、いろんなことに追われ、たくさんのご事に触れ学んできました。(たく

さん取り入れすぎで、まだ消化できていません。)

大学院での生活は、多くの困難に遭遇しましたが、困難も含め本当に様々な刺激があり、学ぶことへの感動がありました。そして、このような刺激や感動を与えてくれたの

在校生の皆さんへ

4年 阿部 真弓



看護は、勉強すればするほど活躍できる範囲の広い学問です。そのため、将来どのような道に進むのか悩む人が多いのではないのでしょうか。

私も悩みました。しかし、私は新しいことに興味や関心を持ち、多くのことに挑戦してきました。その結果、入学当初は考えていなかった、助産

大学生活を振り返って

編入4年 駒場 千裕



約2年前、私は本学の3年次編入をし、今日まで過ごしてきました。そしてその大学生活がもう少しで終わろうとしています。

新しい先生方や新しい友人との出会いがありました。そして何より新しい友人と共に学ぶ日々はとても爽りのあるものだったと感じています。大学は多くのことを学ぶことが

ご卒業 おめでとーうございます

大学院1年 柳澤 美紀



私はこの1年、皆さんが修士論文を仕上げるために時間をかけて努力している姿を目の当たりにしてきました。その姿は後輩の私たちに一つのものを成し遂げることに大変さ、充実感を示して頂いたのではないかと

思っています。本当にお疲れ様でした。

そのような忙しい時期だったにもかかわらず、私が課題等で困っていたときには話を聞いて下さり、たくさん良きアドバイ

スをして頂きました。大変感謝しております。

4月から会えなくなってしまうと思うと淋しい気持ちで一杯ですが、大学院での学びを生かし、臨床でさらにご活躍されることを心より期待しております。

皆さんの臨床でのお話、近況等をぜひお聞きしたいと思っていますので、ときには大学院の方へお寄りください。お待ちしております。

(やなぎさわ みき)

在校生から卒業生へ贈る言葉

4年生のみなさん、ご卒業おめでとーうございます。僕たち3年生がこの大学に入学したとき、不安なことの連続でしたが、先輩方が優しく様々なことを教えてくれたので、毎日を楽しく過ごすことができました。1つ上の

学年の先輩方は、とても身近でとても頼れる方々でした。そして、それは今でも変わりません。僕は看護男子ということで、看

護男子の先輩方には毎日のようにお世話になりました。これから看護師として働いていくうえで、不安なこと、辛いこともあるとは思いますが、そのときはここで過ごした4年間を振り返り、嫌なことは全部吹き飛ばしてください。3年間ありがとうございました。これからも頑張ってください。

(いのうえ たかあき)

卒業生のみなさんへ

3年 井上 貴晃



僕はこの1年、皆さんが修士論文を仕上げるために時間をかけて努力している姿を目の当たりにしてきました。その姿は後輩の私たちに一つのものを成し遂げることに大変さ、充実感を示して頂いたのではないかと

思っています。本当にお疲れ様でした。

そのような忙しい時期だったにもかかわらず、私が課題等で困っていたときには話を聞いて下さり、たくさん良きアドバイ

スをして頂きました。大変感謝しております。

4月から会えなくなってしまうと思うと淋しい気持ちで一杯ですが、大学院での学びを生かし、臨床でさらにご活躍されることを心より期待しております。

皆さんの臨床でのお話、近況等をぜひお聞きしたいと思っていますので、ときには大学院の方へお寄りください。お待ちしております。

(やなぎさわ みき)

卒業生から在校生へのメッセージ

今回の実習は、「場をとにもする」とことは何か、を自分なりに考えた実習でした。当初、私は「場をとにもする」=「会話をすること」という考えであり、言葉を交わさない無言の時間は相手に気を遣わせてしまう、そんな思いのあまり何を話そうかと考えてばかりでした。しかし結局は私が無言の時間に堪えられなかっただけだったので、看護では患者が主体であり、決して自分中心

に考えてしまっただけは関係は築きあげられません。人と人の関係を築くには「時間」が必要であり「会話」ではありません。「時間」を得る為には、「場をとにもする」ことが大切になってきます。私にとって看護の根本的な部分であり、今後にも活かしていくべきことを学べた実習でありました。(きくち りか)

実習を通して学んだこと。

母性看護学実習で学んだこと

3年 高野 梢



1つの命の重み、そしてその命を誕生させるために備わっている人間の力に驚き、その偉大さに衝撃を受けた2週間でした。看護の対象は妊婦、産婦、褥婦および新生児、家族と様々です。無事に児が誕生し、その後も母子共に良好に経過できるように身体的な側面を援助する知識や技術を身につけていくことはもちろん大切です。しかし、児の「父親になる」、「母親になる」こ

課題別実習での学び

4年 大堀 裕子



私は、がんの手術を受けた患者さんが在宅に戻られてからの生活について、入院中のかかわりを通して支援したいと考え看護を展開しました。退院後の患者さんのQOL向上のためには、入院初期から退院後の生活を視野に入れてかかわり、患者さん自身が退院後の生活をイメージできるようにすることが重要であることをあらためて学びました。

また、実習を通して、がん患

精神看護学実習を終えて

3年 菊池 里香



今回の実習は、「場をとにもする」とことは何か、を自分なりに考えた実習でした。当初、私は「場をとにもする」=「会話をすること」という考えであり、言葉を交わさない無言の時間は相手に気を遣わせてしまう、そんな思いのあまり何を話そうかと考えてばかりでした。しかし結局は私が無言の時間に堪えられなかっただけだったので、看護では患者が主体であり、決して自分中心

管理実習を通して組織人としての自覚を持つこと

4年 早坂 汐里



看護管理実習は大学生活最後の実習でした。今までの実習では様々な分野での看護職の専門性と働きを学びながら、個性のある看護について考えてきました。そしてこの実習では、よりよい医療・看護を提供するために病院・組織はどのような役割を担っているのか、組織の管理職の業務と実際の視点から実習をしていくことができました。また、組織の一員としての自覚や、一人の社会人であることの

たいと思います。(はやさか しおり)

授業を通して学んだこと。

1年間の授業を振り返って

1年 鹿野 雅之



入学してからの約1年間を振り返ってみると、前期は看護学の基本や生態機能学などの授業で、主に看護師に必要な知識を学んでいた気がします。後期に入ってから、生態機能学をはじめとした講義で知識を養いながら、基礎看護技術によって実践的なことを学んできました。基礎看護技術を学ぶことで、今まで思い描いていた以上の看護師の大変さや難しさを実感しました。今学んでいることは、自分が看護師になったときに必要な最低限の技術であるので、1つ1つの授業を大切に、自分自身のスキルアップにつなげていきたいと思っています。

後期になり、ようやく自分が将来看護師になるんだという自覚を持つことができました。この思いを常にもち、いい看護が提供できる看護師を目指し、これからの授業に取り組んでいきます。(かの まさゆき)

平成21年
10月31日(土)~
11月1日(日)

第4回 光翔祭

テーマ 医心伝心

このテーマには、来ていただきたい方々に何かを伝えられる光翔祭にしたい、心に残るような光翔祭にしたいという学生たちの想いが込められています。

光翔祭を終えて 臨床看護部門



2年 熊坂 江里子

私たちは、がん患者さんの「トータルペイン」に注目し学びを深めました。看護師の方から実際の患者さんのお話を伺い、その痛みの深さや大きさを感しました。患者さんが「痛い」というその痛みを信じて、話を聴くこと、私たちが今できることは限られています。自分がこれから看護に携わっていく上で、今回の学びを活かしていきたいと感じました。

学びの成果を発表する展示物の作成では、どのように表現したらよりわかりやすく理解してもらえるか苦労しましたが、当日は多くの方に足を止めて見ていただけることが嬉しかったです。そして、地域の方々からの貴重なご意見や感想を多数いただき、同時に私たち看護学生への期待も肌で感じることができました。期待に応えられるように日々学びを深め、よりよい看護ができるようになりたいと思います。

(くまさか えりこ)

企画・運営に 携わって



光翔祭副実行委員長
2年 君島 里実

光翔祭を終えた瞬間に私のすべてを埋め尽くしたものが、それは言いようのない充実感と達成感でした。4年に一度の一般公開、看護学部独自の企画、そして何より副実行委員長という重要な役割が私に大きいのし掛かってきた光翔祭でした。

他者に指示を出すという立場を初めて経験して、意見をまとめる事の難しさを痛感し、あらゆる情報を把握しておくこと、その情報を仲間と共有し合うことの大切さを学びました。何も資料がない中で成功を収めることができただけで、クラス仲間を始めとする多くの方々のご協力があったからだと思っています。光翔祭は確かに大変だったかもしれませんが、しかし、大変だったことすらも忘れてしまいうらい得たものは大きかったです。私を支えてくれたすべての方々に精一杯の感謝の気持ちを送りたいです。

(きみじま さとみ)



臨床
看護部門

在宅
看護部門

当日は講演会や発表・展示、模擬店などが行われました。発表・展示は有志の学生が学部・学年を越えて集まり、テーマを設定して7つの部門を立ち上げ自ら学び探

求した成果を発表しました。看護学部生が中心となって立ち上げた部門は「臨床看護部門」と「在宅看護部門」です。

国際学術 シンポジウム

第2回 国際学術交流・シンポジウム
2009年10月8日(木)~10日(土)



フェルガナ大学との交流の経緯

生態看護学部門 鈴木 学爾

福島県立医科大学看護学部国際学術交流委員会では、看護学部設立以来、様々な海外の諸大学・研究機関との学術交流を模索してきました。

2008年5月に元福島県

立医科大学学長・伊藤司氏(同大学名誉教授)を介して、ウズベキスタン共和国タシケント医学アカデミーフェルガナ校からの医療交流の要請がありました。同年9月に中山洋子看護学部

長をはじめ、3名の看護学部教員がフェルガナ校を訪問し、シンポジウム等を通して相互交流を深め、2009年に第2回シンポジウムを本学にて開催することを決定致しました。

10月8日(木)~10日(土)にかけてフオジイル・ラスロフ副学長、ラ イミヤノフ・アブドラジズ内科学部長、ニシヨノヴァ・アブドラシノヴァ高等看護部門長の3名をお招きし、第2回国際学術交流とシンポジウムが開催されました。

第2回国際学術交流シンポジウム

10月8日は中山看護学部長と国際学術交流委員にてウエルカムランチを開催致しました。その後、附属病院のNICU見学、ICTラウンドの同行、皮膚・排泄ケア認定看護師とがん性疼痛認定看護師の実践活動の見学、ヘリナースの説明・ヘリ

ポートの見学を行いました。10月9日にはスキルラボと講義、看護学部3年生の技術演習を見学していただきました。3名とも演習内容について質問されたり、写真に取られたりとても興味を示されていました。バイタルサイン測定ではフオジ

イル副学長が患者役となり学生が血圧測定を行う場面もあり、思わぬ学生との交流を図る機会となりました。最終日の10日には、「ウズベキスタンタシケント医学アカデミーフェルガナ分校における看護実践と教育の現状」をテーマにシンポジウムが行われ、両校の看護教育の紹介と今後の学術交流の在り方について話し合いが行われました。その結果、今後毎年1回程度のペースで「看護学の教育」に焦点を当て、ワークショップやセミナーなどの形式を取り入れながら交流を継続していくこと等が決定しました。



福島県とウズベキスタンは、伊藤司氏を会長とする「福島県ウズベキスタン文化経済交流協会」と福島県国際交流協会の協力によって、すでに30年にわたる文化経済交流が行われています。今後も看護学部との看護医療教育による学術交流を通して、より深い国際交流が期待されています。(すずき がくじ)

平成21年度看護学部
公開講座委員会報告

公開講座委員会委員長

黒田 真理子

第1回は、「ふくしまの安全医療をめざしてともに考えませんか」をメインテーマに、「安心なお産のために今できること」というサブテーマで11月14日(土)に福島県医師会館にてシンポジウム形式で開催されました。本学部の太田操教授を座長に、3名のシンポジストを迎えて、また、福島県保健福祉部医療看護課のご協力をいただき、活発な討議が行われました。母親の立場から福島市在住の葛西久美子氏が産婦自ら主体的にお産に取り組む必要性を、助産師の立場から福島県立医科大学附属病院の津田裕子氏が院内助産所・助産外来の効果と今後の課題を、産婦人科医師の立場からいわき市立



総合警城共立病院の本多つよし氏が、最近のお産事情や周産期医療の課題を話されました。

第2回は「地域の保健行政データを活かす施策提言ー健診・医療・介護情報のリンクージュによるライフスタイルの解析」というテーマで、12月5日(土)に看護学部棟にて開催されました。本学部の林正幸教授から、健診結果情報・国保レセプト情報・健康アンケート・介護保険情報などを結合・集約して解析し、地域住民のための健康対策提言をまとめた研究成果を発表していただきました。(くろだ まりこ)

看護学部カレンダー

- 3月25日(木)
 - 学位記授与式

- 4月 2日(金)AM
 - 在学生オリエンテーション(新4年次生)

- 4月 2日(金)PM
 - 在学生オリエンテーション(新2・3年次生)

- 4月 6日(火)
 - 入学式

- 4月 6日(火)～7日(水)
 - 新入生オリエンテーション

- 6月18日(金)
 - 開学記念日

- 7月 3日(土)
 - オープンキャンパス

退職された先生から

教育から現場へ

生命科学部門 加藤 清司

10月1日より県職員となりました。15年ほど前まで大学と兼務していた福島保健所が組織再編されてきた県北保健福祉事務所が職場であり、久しぶりに古巣に帰った気分です。この原稿を書いている11月下旬は新型インフルエンザが蔓延中、電話は鳴りっぱなし、とても活気があるといったら不謹慎か。そんな中で1期生が保健師として活躍しており、卒業生と一緒に働ける幸せを感じています。(かとう きよし)

新任の先生から

母校に帰ってきて

家族看護学部門 柴田 幸恵



改めまして、11月から家族看護学部門の助手に就任いたしました柴田です。私は、1期生で本学を卒業し、横浜に助産師として就職しましたが、自分が教員として母校で働くとは思っていませんでした。今、皆様と講義や実習などを通して、自分の看護がどうだったのか振り返ることが出来、とても新鮮な毎日をお過ごししております。これからも、学ぶ姿勢を忘れず、皆様と共に成長出来たらと思っております。よろしくお祈りします。(しばた さち恵)

新任の先生から

よろしくお祈り致します

生態看護学部門 渡邊 かおり



11月より生態看護学部門の助手として着任させて頂きました。私は本学の5期生で卒業後は付属病院で3年7ヶ月看護師として働いてきました。現在は老人看護学実習に入らせて頂き、3年生とともに日々奮闘の毎日です。今でも自分が学んだ学舎で働くのを不思議に感じておりますが、この素晴らしい環境の中で皆様とともに成長していきたいと思えます。どうぞよろしくお祈り致します。(わたなべ かおり)

新任の先生から

初めまして

生態看護学部門 阿部 範子



2009年10月から小児看護学の助手として勤務しています。私は看護学部の4期生でもあります。卒業後は福島を離れていたためほとんど大学に来ていませんでしたが、私が学生として通っていたときと変わっていないなあと感じています。今は主に、3年生と一緒に領域別実習で医大病院に行っています。教員という仕事は初めてで、まだまだ未熟者ですが、みなさんと一緒に成長していきたいと思えます。よろしくお祈り致します。(あべ のりこ)

編集後記

少し暖かくなったかと思うとまた寒い寒さが戻り、暖房がいらぬ暖かい春の陽気が待ち遠しい毎日です。

今月上旬、領域別実習が終了しました。実習を終えた3年生の表情からは逞しさが感じられるようになりました。一緒に基礎看護技術を学んだ1、2年生の頃を思い出し、実習を通して成長した姿がとても嬉しく、頼もしく感じています。また1年後どのような変化を見せられるのが楽しみです。

卒業を間近に控えた皆さんは、新しい生活に向けて期待や不安など様々な想いを巡らせていることでしょうか。在学中の様々な経験が今後の皆さんの助けとなり、また、悩んだり迷うことがあったときには、皆さんにとってこの学舎が「帰ってくる場所」となれば嬉しいですね。

最後に、お忙しい中寄稿して頂きました方々に深く感謝申し上げます。(しょうじ まなみ)

【編集委員】

- 林 正幸、本多たかし
- 横田 素美、飯塚 麻紀
- 野田 智子、濱尾 早苗
- 酒井真知子、庄司真奈美